

インターネット利用で蓋をして距離をとる友人との情緒的交流

—現代の友人関係のあり方からの検討—

白畑 眞緑

神戸女学院大学大学院人間科学研究科 博士後期課程3年

要約

本論文では、従来の友人関係と近年の友人関係のあり方の異なる点を概観し、LINEを中心とした対面でないコミュニケーションにおける若者の気持ちの抱え方を論じることを目的とした。2000年代以降、スマートフォンの普及に伴い、友人といつでもどこでも繋がれるようになったと同時に、即時的な返信や相手の様子がわからないことが心理的負荷となっている（若本、2014；時岡、2018）と報告されている。いくつかの調査から、自身が期待した通りに友人から返信がないことに対する不満を表出することは少なく、相手が自身に対して否定的に評価していると思う傾向にあるのではないかと考えられた。従って、今後は、LINEやSNSのような対面でない繋がりを維持する現代の若者が、どのような感情を抱えながら友人関係を築いているのか、友人関係のあり方や自己感から検討していく必要があることが考えられた。

キーワード：友人関係、LINE利用、自身の感情、対人関係の適応

I. 従来の友人関係の発達的变化と現代の友人関係

(1) 従来の友人関係の発達的变化

友人関係のあり方は、人の心身の発達とともに変化する。学齢期までは男女関係なく、同じ場にいることから交流が始まり、学齢期以降は好みや行動を同じくする相手に一体感を抱き、関係を深めていく。

学齢期以降の友人関係グループについて、保阪（1996）は仲間関係の発達段階説を提唱している。児童期後半からみられるようになる、仲間との同行動による一体感を重視する徒党集団であるgang-group、思春期頃にみられる趣味やクラブ活動等を通して互いの共通点や類似性を言葉で確かめ合うchum-group、高校生以降になると互いの異質性を認め合い、自立した

個人として尊重し合う関係のpeer-groupの順に変化するという。gang-groupを形成しchum-groupへと移行する、仲間関係の変化がめまぐるしい小学生を対象に、国枝・古橋（2006）は仲間との会話内容の変化に着目している。男女ともに2、4年生は遊びに関する話題が中心であり、会話が道具的な働きであるのに対し、6年生ではテレビ番組といった共通の話題を楽しむ児童が増加したことを報告している。また、友人に秘密の話をする人数は、女子では2年生と4年生の間で増加し、男子も学年が上がるにつれて増加したことから、児童期後期には会話のやりとりそのものを楽しむとなると示唆されている。さらに、小学校低学年頃は集団の中で個人の結びつきは弱い、高学年にかけて集団の中の仲間との親密性が高くなる一方で、

同じ仲間集以外の他者を寄せ付けないようにする排他性が高まるとされている（三島、2004）。以上を見ていくと、学齢期の仲間関係の形成の中で、友人との場の共有から言語を用いた情緒的な交流が可能になることがわかる。この交流が土台となり、思春期には、お互いの行動の背景にある情緒を汲み取ろうとするところのはたらしが動き始める。

思春期から青年期の友人関係の発達的变化について、榎本（1999）は、中学生頃から男女で友人関係のあり方に性差が見られるが、大学生頃には男女ともにお互いを尊重し理解し合おうとする関係になると述べている。落合・佐藤（1996）も、中学生頃は広く多くの友人と付き合い合おうとする者が多いのに比べ、大学生では限られた友人と親密な関係を築く者が増え、高校生頃はその過渡期であると述べている。10代以降は、自身が本音を見せ、お互いの話を聞き理解し合えるような相手を模索する時期に入り、大学生頃には、特定の友人とお互いの考えを尊重し合える関係を維持するようになることがわかる。

（2）従来の友人関係とは異なる近年の傾向

1990年代半ばから、先に述べた友人関係の発達の変化を辿らない青年たちの存在と、彼らの友人関係の希薄化が指摘されるようになった。友人関係のあり方が従来とは異なっている背景として、保阪（1996）は、受験競争の影響等を受け、gang-groupを十分に経験しないままにchum-groupを形成し、精神的に未熟な状態に留まっていることを指摘している。そして、他者との違いをはっきりと表現できないままに青年期を迎え、大学生でgang-group、chum-groupをやり直し、大学卒業後も含めて本来の年齢相応のpeer-groupも経験することとなっていると述べている。また、小此木（1992）は、自己愛の視点から若者のあり方の変化を指摘している。80年代後半から増加した、自宅に引き

こもり、社会との交流を断つ子どもや、会社に出勤することに困難を抱えた若いサラリーマンといった若者の心理的傾向として、万能感と肥大した自己愛を抱えていると述べ「彼らは生まれたときからボタン一つ、スイッチ一つで何でも思う通りのことができるし、思い通りの感覚を味わうことができるという全能感」を持っていると指摘している。さらに小此木（1992）は、こういった青年たちは、「外の対象（中略）、つまり、対象との相互関係の中で生きるのではなく、むしろ、自分の内側の、内的自己空間の中で、自らの空想・幻想による満足を味わい楽しむ」と述べている。従って、思春期以降の友人関係のあり方が従来異なり、希薄化していると捉えられる背景には、友人と交流する場を従来のように確保することができず、その代わりに自己の欲求や周囲から求められることを、つまり自己にエネルギーを注ぐ時間が増加したことが関係していると言える。つまり、自分で「自己空間」を満たすことができる若者は増えたが、その一方で友人との交流が減少し、自身が良いと感じている「自己空間」を友人に受け入れてもらえるかどうかを気にする青年が増加したのではないかと考えられる。

それでは、友人関係を深めることが難しい青年はどのように友人関係を維持しているのだろうか。小塩（1998）は表面的な友人関係を築く青年の特徴として「自分の本音を出さず表面的で、違いに気遣う」友人関係を広く持つ青年は、自身が他者から注目や賞賛されることを望み、自己愛傾向が高いことを示唆している。また、上述の表面的な友人関係を築く青年は、自尊心が低いことがわかっている。この結果について小塩は、表面的な友人関係を築く青年は、友人関係が深まることで友人からの評価が下がり、自身の自己肯定感が下がることを恐れるために、友人と親密な関係を築くことを回避していると考察している。また、現代青年の傷つきやすい心性に着目した岡田（2011）は、希薄な

友人関係を築く青年の特徴として、自他ともに傷つかないように友人に気を遣い、揉めることのない円滑な友人関係を維持する傾向と、友人関係が深まることで自身が傷つくことを恐れて関係を築くことを避ける傾向を示唆している。さらに、飛谷（2021）は、2000年以降のインターネットを介して繋がる思春期グループについて、グループの実体がないために、友人間で確認し合い関係を深める作業やその中で生じる摩擦を乗り越える作業に取り組まずに思春期を通過する可能性を指摘している。さらに、「デジタル・ネイティブ世代の主体はバーチャル世界が見かけ上の満足を幻覚のように即座に与えてくれるため、フラストレーション耐性が著しく低下する」とも指摘している。

以上から、思春期以降の友人関係のあり方は、お互いの本音を見せ合うことよりも、円滑な関係を維持するためにあまり深くは踏み込まずに様子を窺うような付き合い方が主流になっていると言える。また、飛谷(2021)の知見から、インターネットが可能にした対面でない友人との繋がりを指先が届く範囲で切り替え可能になったことに伴い、友人関係の希薄化だけでなく、自身が困難に対処する能力も低下していると考えられるだろう。

Ⅱ. インターネットを通じた友人関係の維持

(1) 自己開示と友人関係の維持の変化

次に、インターネット利用による友人関係のあり方の変化について見ていきたい。1980年代はインターネットが普及し、1990年代では若者にも流通し、友人関係の構築、維持の方法は大きく変わったと言える。さらに、ポケベルや携帯電話の登場により、対面でなくてもリアルタイムで他者と交流することが可能になった。三浦（2008）は、自身が認識している「本来の自分」を対面ではないcomputer mediated communication（以下、CMC；FacebookやTwitterなど）では表現しやすく、対面でないことが自由なコミュ

ニケーションを可能にし、急速に相互理解、自己開示が深まると述べている。一方で、対面でないことで「偽の自分」を演じやすくなることも指摘している。三浦（2008）は、ネットコミュニティでは匿名での交流も可能なため、個人を特定されないあるいはできない状況でコミュニケーションが成り立ち、対面のような接触効果による相手への好意的な感情は持ちにくく、対面では伝わる情報がインターネット上では制限されることにより、そこで築かれる対人関係における感情はネガティブにもポジティブにも作用し、無秩序に意見の偏りが生じてしまうと述べている。

インターネットを利用した他者との交流は、三浦が指摘するように、対面のような他者との感情的な交流が生じにくいいため、自身が発信したいと思うキャラクター像を一方的に提示、発信しやすいと考えられる。一方、自らが発信した限られた情報で、閲覧者側も自身の価値観で良し悪しを判断するため、発信者側の思いや考えが正確に伝わるとは限らず、両者の間で齟齬が生じると言える。インターネットを利用した他者との交流の場は多くあるが、ここではより親密性が高く友人関係の構築と対面でないやりとりを中心と考えたい。そこで、まず、個人間でのやりとりを可能にしたEメール、携帯メールに関する先行研究を見ていきたい。

(2) 友人関係の維持とメールとの関連

1990年代半ばからメールの利用が一般的になり、2000年代に入ると携帯電話の普及に伴い、メールの利用が幅広い世代に広がった。中学生のネット使用に関する研究（安藤、2005）では、Eメールの使用量が友人関係の孤独感の低下と関連があることが報告されており、ネット使用の多さがネット上に限らず実際に友人からのソーシャルサポートが増えると感じることと関連があると指摘している。この研究から、直接に友人の援助を受けられなくても、メールのやり

とりやネット利用はソーシャルサポートを得られるという感覚を抱きやすくなると言える。友人との親密性から携帯メールでの自己開示量を検討した古谷ら（2005）の研究では、相手と対面での親密性が高まると、対面では「将来の目標」「悩み事」の自己開示量は増加し、携帯メールでは世間話のようなあたりさわりのないやりとりが増加することが報告されている。一方、相手との親密性に変化がないあるいは低下した場合には、携帯メールでの自己開示量に変化はないことが示されている。この結果について、古谷らは、携帯メールは相手と最低限度の関係を維持するツールとして利用されており、相手との親密性の向上は対面での関係が土台になっていると述べている。友人とのメールのやりとりは、他者から援助を受けているという感覚が得られやすいが、その利用の仕方は道具的であり、自身の本音を出すかどうかは、友人との対面での親しさが重視されることがわかる。

また、携帯メールへの依存と他者への依存や自己の社会的スキルの評価との関連を検討した研究では(柴田ら、2012)、携帯メールに依存している人ほど他者評価や他者からの支援に依存する傾向が高いこと、他者とのコミュニケーションにおいて携帯メールが重要であると感じている人ほど自己肯定意識と自己の社会的スキルを低く評価し、他者からの手助けを求める傾向にあることを報告している。この研究から、携帯メールで友人と繋がっているということ自体が精神的な支えとなっていることが考えられる。そして、1人では抱え続けられない問題をできるだけ早く解決するために、携帯メールを援助要請のツールとして使用していると考えられる。

この携帯メールの利用のあり方は、近年のSNS利用と類似する点があるのではないだろうか。遠山（2012）は、大学生を対象に友人関係とコミュニケーション・メディア選択との関連を検討し、リアルで友人関係を維持する社会的

な学生でも、リアル友人の維持管理のため、携帯メール以外にTwitterなどのソーシャル・メディアを活用することを示唆している。リアル友人とSNSでも繋がり、“つぶやく”ことで自身の状況をタイムリーに知らせるだけでなく、相手を特定しなくても友人からの援助を得られやすいと考えられる。反対に、相手の状況も容易に知ることができ、自身が相手の困難に気づき、早くに反応することで相手を助けているという実感が得られやすいのではないだろうか。

Ⅲ. 現代の友人関係とLINEを中心としたSNS利用との関連

(1) LINE利用における利便性と心理的負荷

前項で示したように、スマートフォンの普及に伴い、SNSの利用が広がり、多くの他者と気軽に交流を持てるようになった。しかし、自身が知っている相手にのみ公開されるようにSNSのアカウントを設定している人も多くいる。最初は多くの他者との交流の場として利用されていたSNSも、限られた相手との交流の場として利用されることも少なくない。その中で、LINEは家族や友人など、身近な相手とやりとりするツールとして最も利用されている。ここでは、主に友人関係において、LINEがどのように利用され、対面とは違うLINE上のやりとりになどどのような思いが生じやすいかを見ていきたい。

安齋ら（2018）によると、中学生は自身が落ち込んだ場合に話を聞いてもらおうといった「自己開示」の行動と、友人から自身がどう見られているのかを気にするといった「友人からの評価の懸念」が、「身近な人やグループにおける安心感の獲得」や「自己アピール」「不快な気持ちの共有と解消」といったLINE利用行動に関連していることがわかっている。また、若本（2014）の、中学生の友人関係におけるLINEコミュニケーションといじめとの関連の調査では、複数の友人全員が等しく仲が良い場合には、対人関係をめぐる心理的状態が良好であることが示さ

れている。一方で、仲の良い友人とのコミュニケーションが対面では低くLINEでは高い群がいじめの加害者になりやすいことが示唆されている。この結果について若本は、LINEの使用頻度の高さが直接いじめに影響するのではなく、対面でのコミュニケーションの低さによって、LINEトラブルが生じやすくなるのではないかと指摘している。従って、中高生では、対面で親しくしている友人とのLINE上のやりとりには安心感を抱くことがわかる。一方で、LINE上では頻繁にやりとりしていても、対面での関係を良好に感じていなければ、友人からの評価を気にしたり、揉め事に発展するなど、心理的負荷を感じやすくなると考えられる。

大堀ら（2021）の、高校生を対象にしたLINEに関する調査では、LINEで嫌な体験をした後、嫌な体験をした相手と対面する際に、嫌な気持ちを持ち続けたまま対面している場合が多く、相手と対面する前に第三者に相談することによりポジティブな気持ちへと変化させていると示唆されている。また、女子では友人に好かれていたいと思うほど、男子では本音を見せないように付き合おうとするほど、早く返信をしなければならないと思う傾向にあることを示唆している。これについて大堀（2021）は、返信が遅れることで「相手が否定的に解釈する可能性」を想定することが速い返信にとらわれることにつながっていると述べている。この研究から、相手の様子が視覚的に確認できず、自身が嫌な体験をしている場合には、“自分が嫌だと感じている”のではなく、“相手が自分を否定的に評価している”と考えていることがわかる。

また、時岡ら（2017）の高校生を対象にした調査では、LINEの気軽さが高まる理由として、対面でのやりとりで相手から否定的な評価をされるのではないかと不安を感じやすく、LINEのほうが気軽にできることを指摘している。しかし、それと同時に否定的な評価を避けようと素早く返事をしなければならないという気持ちが

生じることを指摘している。さらに、非言語的な手がかりがないために相手の意思や感情がわからず、相手との間に齟齬が生じているのではないかと感じていると述べている。大堀ら（2021）や時岡ら（2017）を見ていくと、友人関係に問題が生じないように、素早い返信を気にすることが心理的負荷となっており、友人が期待する返信ができなければ、相手が自分に対して否定的な評価をするという思いが生じることがわかる。ここでは、相手から否定的な評価を受ける恐れが意識され、相手が期待しているであろうタイミングや内容で返信することが嫌だ、と思っている自身の気持ちは否認されているのではないだろうか。

LINEにおけるネガティブな感情は、自身が送ったメッセージに対して相手が既読をつけて返信が無いことで生じることが報告されている（加藤、2017；田附ら、2019）。また、田附ら（2019）の研究では、友人からのメッセージに返信する気持ちはあるができておらず、既読をつけた状態に対して、高校生では相手（送り手側）が動揺していると思いやすく、大学生では自分が返信できない状況を相手が察してくれていると感じやすい傾向が示唆されている。この研究から、返信を送ることよりも、返信を待つほうが心理的負荷がかかることがわかる。さらに、LINEへの依存が高い人は、送った相手が親友や家族といった親密な相手であるほど、その日のうちに返信がないと不安が生じやすいことも示唆されている（加藤ら、2017）。したがって、やりとりする相手との関係性によってもネガティブ感情の生じ方が異なると言える。ネガティブ感情が早くに生じる人は「友だち」と「グループ」の数が少ない傾向にあり、ネガティブ感情を比較的遅く生じる人は「友だち」と「グループ」の数が多傾向にあることが示唆されている（加藤ら、2020）。つまり、家族や親友といった、限られた親密な相手とLINEでやりとりをしている人は、自身が期待する速さで相手から

返信が無いことに対してネガティブな感情を抱いていることを自覚できると言えるだろう。一方で、「友だち」や「グループ」を多く持つ人は、親しさの程度に限らず、多くの友人とLINE上で繋がることで、ネガティブ感情が生じないように、要件や状況によってLINEでやりとりする相手を切り替えているのではないかと考えられる。

(2) LINE上のやりとりから考える自身の気持ちの捉え方

前項では、LINEでやりとりする相手との関係性によって、ネガティブ感情が生じる程度や速さが異なることがわかった。本項では、友人関係のあり方によって、LINE利用とやりとりの受け止め方が異なるのかを見ていきたい。中山(2018)は高校生を対象として、友人関係のあり方とSNSにおけるネガティブ経験と利用頻度との関連を検討している。SNSの利用頻度や複数のSNSを利用していることよりも、友人関係のあり方がSNSのネガティブ経験に影響することを指摘している。西村(2021)も、友人関係におけるLINE上での自己開示の程度には、オフラインでの友人関係のあり方が反映され、CMCの研究で指摘されているような、オンライン上での自己開示にやすさは示唆されなかったと述べている。西村(2021)は、CMCでの自己開示の深さには匿名性の高さを理由に挙げ、「LINEのような既知の関係が反映された中での利用においてはメディアの効果は限定的である」と述べている。また、円滑な友人関係を志向する青年は、LINEを「利便性という点で有用であると認知」しており、友人関係を築くことに回避的な青年は、LINE上のやりとりに対して束縛感や不快感を強く認識していることを示唆している。

以上の友人関係におけるLINE利用の研究を見ていくと、携帯メールに関する研究の結果と同じように、対面での友人関係がインターネッ

トを介したやりとりの土台となっている点は類似していると言える。携帯メールに関する研究は、友人と携帯メールで繋がりを感じられることと社会的援助を得られるという感覚を持てることの関連が多く検討されていた。一方、LINEやSNSに関する研究は、友人からのメッセージや返信を待つ間あるいは自身が返信する際の感情に着目した研究が多いように思われる。その理由として、思春期以降に従来のような親しい友人関係を築くことが難しくなっている背景にある、自身の感情を取り扱うことが難しくなっていることが挙げられるだろう。自身の感情を十分に感じられないまま、自身の気持ちよりもLINE上のやりとりの相手の様子を気にしながらメッセージを送受信しなければならない状況に疲れ、「既読・未読無視」「ブロック」といった、突然にやりとりを断絶するといったことが生じていると考えられる。

小此木(1992)や飛谷(2021)、岡田(2011)が指摘するように、現代の青年は、友人関係を深めることよりも、適度な付き合いに留め、自身の欲求や世界を楽しむことにエネルギーを注いでいる。そうすることで、友人関係の中で自身が傷つくこと、友人を傷つけて自身が傷つくこと、葛藤を抱えることから自身を守っているともいえるだろう。もし、自身が相手に不満や不快感を抱いていると感じてしまうと、その感情が相手を傷つけ友人関係を崩してしまう可能性が生じる。そうならないように、自身ではなく、相手が自分に対して不満を持っていると置き換えることで、相手に不満を抱かせないように自身が気遣うことができ、友人関係の調節を自分が行っているという安心感を得ているのではないだろうか。その友人関係の調節が揺らぐ部分がLINEの返信を“待つ・待たせる”間や、既読を“付けた・つけられた”ことによって生じる相手の状況と自身の気持ちを考えたり想像する時間と考えられ、耐え難い時間となっていると言えるだろう。今後、思春期・青年期において、

LINE上のやりとりで抱く自身の気持ちと相手の気持ちをどのように想像するかを検討することで、思春期青年期の人たちの友人の捉え方や友人関係における心配事を知ることができるのではないかと考えられる。

おわりに

本論文では、従来の友人関係の発達的变化とは異なる近年の友人関係のあり方と、インターネット利用、特にLINEを中心とした友人との個人間でのやりとりに着目し、近年の友人関係のあり方とLINE上のやりとりの特徴を考察した。そして、LINE上のやりとりでは、返信を待つ間に生じる相手への思いが、青年の友人関係のあり方や青年自身の自己感の違いによって、捉え方が異なることが考えられた。また、返信を待つ間に生じる感情がネガティブなものであった場合に、返信が無いことで自身が相手に不満を持つのではなく、相手が自身が送ったメッセージを否定的に受け取ったか、あるいは自身を否定的に評価しているのではないかと考える傾向にあるのではないかと考えられた。今後、LINEやSNSにおける対面でないインターネット上のやりとりにおいて、現代の若者がどのような感情を抱えながらコミュニケーションをとっているのか、対面でのやりとりとインターネット上のやりとりのどちらが本音であると感じているのかといった捉え方の違いを検討し、現代の若者の友人関係における特徴や問題を考えていく必要があるだろう。

引用文献

安藤玲子・高比良美詠子・坂本章 (2005). インターネット使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響, パーソナリティ研究, 第14巻, 第1号, p69-79.
安齋由里子・沢崎真史・石川満佐育 (2018). 中学生の友人関係とSNS利用行動との関連—LINEに着目して—, 日本教育心理学会第60

回総会発表論文集, p633.
榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化, 教育心理学研究, 47, 180-190.
福重清 (2016). 2000年代の都市青年の人間関係—友人関係をめぐる10年間の変化—, 専修人間科学論集, 社会学編, pp. 113 ~ 120.
古谷嘉一郎・坂田桐子・高口央 (2005). 友人関係における親密度と対面・携帯メールの自己開示との関連, 対人社会心理学研究, 5巻, 21-29.
保坂亨 (1996). 子どもの仲間関係が育む親密さ—仲間関係における親密さといじめ, 現代のエスプリ 親密さの心理, 至文堂, 43-51.
加藤由樹・小澤康幸・加藤尚吾 (2017). LINEにおける4種類のネガティブ感情が生じるまでの返信の待ち時間～既読状態と未読状態の比較～, 日本社会心理学会第58回大会発表論文集, 323.
加藤尚吾・加藤由樹 (2020). LINEグループトークにおけるネガティブ感情の発生のタイミング: LINEの「ともだち」及び「グループ」の数との関係, AI時代の教育論誌, 第2巻, 1-6.
國枝幹子・古橋啓介 (2006). 児童期における友人関係の発達, 福岡県立大学人間社会学部紀要, Vol.15, p105-118.
三浦麻子 (2008). ネットコミュニティでの自己表現と他者との交流, ネットコミュニティでの自己表現と他者との交流, 電子情報通信学会紙91, pp. 137-141.
三島浩路 (2004). 友人関係における親密性と排他性—排他性に関連する問題を中心にして—, 名古屋大学大学院発達科学研究科紀要心理発達科学, 51, 223-231.
中西新太郎 (2004). 若者たちに何が起きているのか, 花伝社.
中山満子 (2018). 高校生の友人関係とSNS利用に伴うネガティブ経験, 科学・技術研究, 第7

- 卷, 2号, p127-132.
- 中山瑠美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討, 教育心理学研究, 第54巻, p188-198.
- 西村洋一 (2020). 大学生の友人関係におけるLINEの利用: 自己開示の深さおよび効用認知に注目して, 聖学院大学論叢, 第32巻, 第2号, p127-141.
- 岡田努 (2011). 現代青年の心理学 若者の心の虚像と実像 世界思想社.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化. 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 小塩真司 (1998). 青年期の自己愛傾向と自尊心, 友人関係のあり方との関連, 日本教育心理学研究, 48, 280-290.
- 小此木啓吾 (1992). 自己愛人間, ちくま学芸文庫.
- 大堀優・永山智之 (2021) 高校生のLINEでのやりとりに対する認知と友人関係の関連 -LINEで嫌な体験をした時と対面時の変化の検討-, 発達心理学研究, 第27巻, p103-112.
- 柴田拓・菅千索 (2012). 携帯メール依存が青少年に及ぼす影響について, 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, No. 22, p55-61.
- 田附紘平・松波美里・木村大樹・鈴木優佳・橋本真友里・柴田彩花・松井祥可・桑原知子 (2019). LINEの既読をめぐる葛藤場面における青年の心理の特徴, 心理臨床学研究, 第37巻1号, 16-28.
- 飛谷渉 (2021). 新しい思春期モデル, 木部則夫・平井正三監修, 吉沢伸一・松本拓真・小笠原貴史編者, 子どもの精神分析的セラピストになること, 金剛出版, 31-49.
- 時岡良太・佐藤映・児玉夏枝・田附紘平・竹中悠香・松波美里・岩井有香・木村大樹・鈴木優佳・橋本真友里・岩城晶子・神代末人・桑原知子 (2017). 高校生のLINEでのやりとりに対する認知に現代青年の友人関係特徴が及ぼす影響, パーソナリティ研究, 第26巻 第1号, 76-88.
- 遠山茂樹 (2012). 大学生の友人関係とコミュニケーション・メディア選択との関連性に関する研究, 国際社会文化研究, Vol. 13, p61-92.
- 若本純子 (2014). 高校生のLINE使用と, いじめ, 友人関係, 心理面との関連-仲がよい3人の友人とのコミュニケーションに着目して-, 教育心理学研究発表論文集.